

マイクロ・クレジットとバングラデシュの貧困削減

松井 範 惇

要旨

本稿では、開発のためのマイクロ・クレジット利用が大規模に行われているバングラデシュで、グラミン銀行を中心とした、貧困削減のための戦略としてのマイクロ・クレジットがいかに有効に機能しているのかを、筆者の現場での記録といくつかの調査研究から展望し将来への課題を検討する。グラミン銀行の概要を紹介し、そして、筆者による調査から特に印象に残った3つの村の様子をできるだけそのまま再現するような形で紹介する。次に、マイクロ・クレジットと呼ばれる貧困層を対象とする少額融資の概要、仕組みとその評価を試みる。最後に、マイクロ・クレジットの将来を考察し、本論のまとめとする。

1. はじめに：

1997年に世界銀行は、総合的な農村開発戦略，“From Vision to Action”で、農村貧困層の削減，農村の人々の生活の豊かさの改善，そして，飢餓の撲滅，の3つを中心的な戦略目標とした。しかし，世界経済のグローバル化の一層の進展とともに，世銀総裁ウォルフェンソンが言うように，「貧困への挑戦はますます大きく，一層困難になっている。近年のより相互依存的になっているグローバルな経済の恩恵の多くは，最貧国を迂回しているし，危険のいくつかは，例えば，金融の不安定性，感染症や，環境の劣化，などの危険性は，それらの国々に大いなる負担を強いてきた。」世銀の新しい提案では，国連のMDG（ミレニアム開発目標）に合わせて，農村開発のための

¹World Bank (2003), *Reaching the Rural Poor: A Renewed Strategy for Rural Development*, xiii および各章を参照。

戦略として次の5点があげられている：(1) 農村貧困層に焦点をあてること、(2) 貧困の多面性に注目し、幅広い経済成長を推進すること、(3) 維持可能な農村開発のため、貧困削減には多分野にわたる複眼的なアプローチをとり、農村地域を全体としてとらえること、(4) 関係するすべての人々(stakeholders)の参加・協力を求めること、(5) グローバルな発展・展開の個々の途上国への影響を見極めること¹。

農村貧困、そして貧困層全般の所得向上のみならず、彼らの自立、能力開発(capacity building)、エンパワメントなどに、有効な開発のためのメカニズムとして、最近、注目されているものの一つに、マイクロ・クレジットがある。マイクロ・クレジットとは、通常、貧困削減などを主な目的とする少人数グループ制の無担保少額融資の仕組みを指す。融資の対象は、通常の金融機関へのアクセスを持たない貧困層であることが多い。従って、担保を取らないことが1つの特徴である。その代わり返済を促進するために、グループによる連帯責任制をとっているところが多い。自家営業の個人企業を助成するため、少額の金融に限り、たいていの場合毎週の返済システムをとっている。マイクロ・セイビング(貯蓄)、マイクロ・インシュアランス(保険)の仕組みを含めて、全体でマイクロ・ファイナンスと呼ぶ場合もある。零細企業の育成・促進のための少額融資は、途上国のみならず工業国でも見直されつつある。

貧困層の人々に直接に、金融へのアクセスを確保し融資することは、所得と生産性の向上のために重要な途の一つである。しかし実は、多くの国で貧困層は融資の対象とは見なされず、制度的にほぼ無視されてきたといつてよい。とりわけ開発途上国では、金融制度の未整備などもあって、このギャップは大きかった。このギャップを埋めるため、マイクロ・クレジットは各種協同組合における金融活動と並んで重要な活動を行ってきた。

本稿は、開発のためのマイクロ・クレジット利用が大規模に行われているバングラデシュで、グラミン銀行を中心とした、貧困削減のための戦略としてのマイクロ・クレジットがいかに有効に機能しているのかを、筆者の現場

での記録と、最近の世界におけるいくつかの調査研究から、幅広く展望し将来への課題を検討する。

バングラデシュはインド大陸の北東部に位置し、東、北、西側の3方をインドに囲まれ、南東部の一部をミャンマーと接している。1971年に独立した、ベンガル語を話す人々の国である。人口は約1億3000万人で、日本より少し多い。しかし面積は、日本の半分弱、北海道の2倍強である。バングラデシュは世界の最貧国の1つに数えられ、人口密度の点では最高のグループに属する。首都ダッカは約1200万人が住む、活力のある町である。

ダッカを中心にバングラデシュの、いくつかの調査機関、政府や民間の組織、大学、グラミン銀行の本店や支店などを訪ねて歩いた。統計局や出版関係も行ってみた。開発関係機関や研究所、農村開発訓練のための機関も訪問し、貧困、不平等、飢餓などの問題・状況に人々がいかに対応しているかを調査した。その中から、バングラデシュの村々を訪ね、人々の生活の様子、貧困から立ち上がる人々の生活などを聞いて歩いた経験から、実際の女性たちの姿を描いてみたい。

以下本論では、グラミン銀行の概要を紹介し、そして、特に印象に残った3つの村の様子をできるだけそのまま再現するような形で紹介しよう。次に、マイクロ・ファイナンスまたはマイクロ・クレジットと呼ばれる貧困層を対象とする少額融資の仕組みとその評価を最近の研究から展望する。最後に、さらにその課題と将来を考え、本論のまとめとする。

2. グラミン銀行：

グラミンとは「農村の」という意味のベンガル語である。「グラム」とよばれるものは、バングラデシュにおける行政上の最小の単位(村)である。その下には、ショマジユと呼ばれる集落がある。

1976年にバングラデシュ第2の都市チッタゴン近くのある村から始まった、主に貧困女性を対象とした小グループ制の、無担保、少額融資のシステムが

グラミン銀行である²。はじめは、創始者のムハマド・ユヌス博士（当時チッタゴン大学の経済学教授）の個人的・試験的なプロジェクトであった。ユヌス博士の信念でもあり、グラミン銀行のモットーのいくつかには、次のようなものがある。すなわち、クレジット（信用）を受ける権利は、すべての人々に、どのような貧しい人、誰にもあること³。元来、人は誰でも、それらの信用を与えられ、機会が与えられれば、それらをうまく使って生活をよくしようという意欲と能力を持つこと。そのため、グラミン銀行は人々が来るのを待つのではなく、銀行が村々へ、人々の方へ出かけていくこと、などがある。貧困だから銀行から借りられない、という人には、ユヌス博士は常々「人々が信用（融資）に値しない（not credit-worthy）のではなく、銀行が人々に値しない（not people-worthy）のである」と言われる⁴。

1983年からは政府認可の特殊銀行として業務を行っている。1995年以降は、どこからも外部資金に頼ることなく完全に内部資金だけで運用が続けられている。グラミン銀行の特徴は、貧困層しかメンバーになれないこと、すなわち、メンバーとなる資格はまず土地無し、または0.5エーカー（約2000㎡＝約60坪）以下の土地所有で測る貧困層でなければならない。メンバーになるには自分を含めて5人のグループ（同性で、親戚以外）を作らなければならない。1週間の特別訓練期間を含む1ヶ月の観察期間を経て、最初の2人までが借りられる。そして、5人グループのうち融資を受けた者の返済が滞った場合、同じグループの他のメンバーは融資を受けられなくなる。担保を取

² Muhammad Yunus (1999), *Banker to the Poor: Micro-lending and the Battle against World Poverty*, Public Affairs: New York. 日本語版は、猪熊弘子訳『ムハマド・ユヌス自伝：貧困なき世界をめざす銀行家』早川書房、1998.

³ 1993年9月、国際協力事業団国際協力総合研修所でのスピーチはとても面白い。M. Yunus, *Participatory Development—Case Study of Grameen Bank*, 「参加型開発—貧困層のための小口金融—グラミンバンクの事例より」

⁴ “job creation”ではなく“ownership”を、“employment”ではなく“self-employment”を、と言われるユヌス博士の考えは最近の次のものからも分かる。“Grameen Bank at a Glance,” January 2004, “Halving Poverty by 2015—We Can Actually Make it Happen,” March 2003, “Some Quick Comments on: A National Strategy for Economic Growth and Poverty Reduction,” June 2002.

らないこと、マイクロ・クレジット（または、マイクロ・ファイナンス）と呼ばれる少額融資を行うこと、たいていの場合、1年間（50週）で利息を付けて返済をするが、返済には毎週のセンターの集会に出なければならない、なども重要な特徴である。

5人グループ制と集会への出席義務の二つは、グラミン銀行のきわめて重要な特徴である。前者は融資返済の連帯責任の感覚を養う意味で重要である。驚異の高返済率が、貧困層を対象とする無担保融資で達成されていること、しかも、それが開発途上国からはじまり、アメリカやイギリスなどの先進工業国を含め他の多くの国にまで広まっているという、従来の開発経済学の暗黙の常識の逆をやって成功しているまれな例である。グラミン銀行方式は、すでに全世界60か国以上で類似の仕組みが採用されている。厳密にグラミン銀行方式でグラミン・トラストと密接に連携を取りながらマイクロ・クレジットを行っているのは、2004年3月の時点では、35カ国121組織であるという。いずれにせよ、グループ制という返済の仕組みは、多くのマイクロ・クレジット組織成功の必要条件の1つともなっている。

後者は、必ずしも融資に直接には関わらない社会教育・人間教育、つまり、時間を守ることや、定期的に貯蓄をしたり、金銭感覚を厳密に保つことの重要性、識字教育や子供の教育の重要性を認識させること、トイレや水などに関する衛生観念や栄養概念の理解、集団の中でのリーダーシップ育成、などの役割を間接的に果たしている⁵。

現在、メンバーは317万人余り、うち96%は女性で303万人、5%が男性で14万人である。返済率は98.9%で世界中の注目の的とされている。現在の融資残高は164億タカ（約312億円）である。最新の報告（2004年1月現在）では、グループ数54万3402である。2004年1月現在で、創設以来の累積融資額は1935億タカで、累積返済総額は1771億タカである。累積返済率をこれらの

⁵坪井ひろみ（2004）『グラミン銀行の社会開発における役割に関する研究』（山口大学大学院東アジア研究科博士論文）が、この観点から、センターの役割、センター集会での信頼関係、住宅ローン、グループ貯金の役割について調査し分析している。

比率でみると、91%ということになる。最大で8グループで作る“センター”（したがって、1センターあたりメンバー数は最大40人）と呼ばれる組織の数は、7万4983である。グラミン銀行のメンバーのいる村の数は、バングラデシュ全土にわたり4万3893であり、支店数は1198である。グラミン銀行のメンバーには1家族で1人しかかなれないから、317万世帯であるので、家族当たり平均5人とするともグラミン人口は、1585万人となり、バングラデシュ総人口の約12%ということになる。

各支店には、支店長が1人いて、その下に行員が8-10名配置されている。支店といっても、いくつかの部屋のある普通の建物で、決して目立つようにはなっていない。グラミン銀行の所有のものもあれば、賃貸のものもある。村の古い集会所などを買い取ったものが多いと聞いた。机がいくつかあり、事務所の中にはポスターや表がはってあるだけである。グラミン銀行は、支店長を始めすべての行員が村々に出かけていく。人々を銀行に来させるのではなく、銀行が人々の方へ出かけることになっている。一人の行員は10センターを担当する。毎日午前中2つのセンターの集会に出かけ集金、集会の取り仕切り、相談事や新規融資の話や、時にはもめ事の仲裁までする。貯蓄口座への入金扱い、融資を受けたメンバーの事業の相談などを集会で行い、集金したお金はそのまま支店に持ち帰り、次の融資に使われる。5日間で1行員は、最大で10のセンター集会に出て、集金をする。

人々はグラミン銀行から借りたお金を使って様々なことをする。基本的には所得向上のための事業に使い、毎週ごとの50回払いで利息を付けて返済する。借りた翌週から返済が始まるので、すぐに商売を始めたり、儲かる仕事の足しにしたりする。乳牛を買いミルクを絞って売り歩く、チキンを飼って卵を売る、池を掘って魚の養殖をする、雑貨店を開き商売をする、などの様々な所得獲得のための元手にする。夫がリキシャ引きやオートタクシーの運転などをするのにも元手になる。貯蓄口座からの引き出し金は、様々な用途に使われるが、食糧の買い出しであったり、子供の教科書代、床に敷くカーペット代や、中学校や高等学校の授業料・受験料などにも使われる⁶。

シュライナー (2003) は、補助金を受けるマイクロ・ファイナンス組織 (MFO) の有効性を検証するために、興味ある分析結果を提示している。彼は、「マイクロ・ファイナンスは貧困削減に最適のプロジェクトであるのか?」という問いに答えるための分析枠組みを構築する。そのため、MFO (マイクロ・ファイナンス組織) の利害関係者 (stakeholder) を6つのグループに分類する。(1) 社会全体、(2) マイクロ・ファイナンスの借り手、(3) 貧困層全体、(4) ドナー、(5) 組織の労働者、(6) マイクロ・ファイナンスへの投資家、である。それぞれの目標も違うし、達成を何で測るかも違うだろう。そのため、効率性を測るための分析用具も異なる。たとえば、(1) 社会全体の観点からは、公共の資金を投入する場合、マイクロ・ファイナンスからの利益はその他の用途に同じ資金を投入したときに比べて大きいかどうかで判断できる。その時には、CBA (コスト・ベネフィット分析) が有用であろう。(2) 借り手の観点からは、借りることの費用以上の利得があるのかが、重要であろう。これを測るのに、シュライナーは反復利用 (repeated use) という概念を使う。(3) 貧困層全体の観点からは、まさに、貧困削減のためにMFOが最適であるかどうか、が問題となる。この時は、成果・実績をはかるCEA (Cost-Effective Analysis) 費用対効果分析が必要であるという。(4) マイクロ・ファイナンス組織に補助金を出すドナー側からみると、そのドナーの資金でどれだけのマイクロ・ファイナンスが貧困層に新しく出されたかが重要であろう。市場の開拓が問題となる。(5) 組織の労働者は、勤め先の存続が大事であろうしドナーが無くなったとき、MFOが自己完結的に維持可能かどうかに関心事であろう。(6) 民間の投資家としては、リスクが同じような事業に比べて、高い収益率を出すかどうか問題となる。

対象とした機関は、ボリビアのバンコソル (BancoSol) とバングラデシュのグラミン銀行であった。シュライナーは補助金依存指数 (SDI) などの指標を計算し、様々な利潤率などを算出した。共通に導かれた点は、第1に、反

⁶ 上掲、坪井 (2004) の 第5章「グループ基金からみた女性の生活」に詳しい分析がある。

復利用、利用者が増えてしかも何回も借り手となっていることから、マイクロ・ファイナンスは貧困の借り手に対して有用な役割を果たしていること。第2に、費用対効果の分析からは、マイクロ・ファイナンスは他の開発プロジェクトに比べ、貧困層に役に立っていること、が確認された。しかしながら、第3に、財政的な自己完結性の欠如は、特にグラミン銀行の場合（データが1983年から1994年）かなりうまくいっている組織でさえも、ドナーからの一層の支持なしには、維持できない、ことを示している⁷。第4は、私的利潤率の低さは、民間からの投資家を逃避させていることが指摘される。

これまで、質的・記述的な分析が多かったこの分野で、機会費用の概念を取り入れ、しかも単なる、全体だけの費用－便益分析をしたのではなく、それぞれの利害関係者の異なった最大化目標を取り入れる形で、MFOの効果を計測したこの研究の意義は大きいだろう。

3. 農村訪問：⁸

(1) ビプロ・バルタ村

2001年12月に訪れたのは、ダッカから車で北に約1時間、ガジプール県にあるグラミン銀行のバションガジプール支店。そこの支店長、アブドウル・シャビズさんに連れて行ってもらったのが、グラミン銀行の第55番センター、ビプロ・バルタ村の集会であった。シャビズさんはグラミン銀行に勤めるようになって14年になると言っていた。10時から始まった集会に3人が少し遅刻してきた。7グループの集会が行われていて29人のメンバー（すべて女性）が出席していた。男性は、支店長のシャビズさん、グラミン銀行本店から私に付き添ってくれているナズルさんと、私の3人だけだった。薄い緑色の個

⁷但し、グラミン銀行は1995年から外からのドナーの資金を受け入れず、自己資金で完結させている。

⁸この節は、松井「バングラデシュ農村女性とグラミン銀行」『自治研やまぐち』第55号、2004年2月、の一部に加筆・修正したものである。

人の通帳と、センターごとのグラミン銀行の白い通帳に、それぞれ毎週の返済、残高が記帳されていく。センター長が行員の横にいて、通帳への記帳と現金の受け渡しを手伝っていた。

全員の週ごとの返済、記帳、合計の確認などが行われている間、集会の行われている7-8坪くらいの集会所の内側の壁にそって、床に座り込んだメンバーの人々は黙って待っている。集会所はこの目的のために建てられた、木と藁と竹、バナナの葉っぱや枝などでできている。こういったグラミン銀行の業務が終わると、行員は様々な事項の連絡や、相談事、また村の様子からいろいろなアドバイスを皆に向けてやっていた。その後、日本から訪問者がきていると言って紹介されたので、いくつか質問を試してみた。

様々な質問を試してみたが、グラミン銀行のメンバーとなる前と後で、自分の生活で一番大きく変わったことは何ですか、と聞いてみた。3人の人、つまり女性、が自分から立ち上がって私に答えてくれた。最初は、アジア・ベガムさんといって、3人の娘と1人の息子のいるお母さんであった。一番下の娘を除いて、皆学校へ行っている。グラミン銀行のメンバーになる前は、家族はとても貧しく、夫は失業中、彼女は近所で女中をして一家の生計を支えていた。最初の融資で乳牛を買い、ミルクを絞って売って歩いた。その儲けから少しの土地を買い、さらに乳牛と子牛を買って牛乳売りの商売を拡大した。これを2年グラミンのローンを借りて、返済した後、住宅用の土地を購入できるまでになった。3年の後、住宅ローンを借りて家を建てた。前年に夫が死亡したが、ミルクの商売があり生活は安定している。住む家もあるため、自分の生活は安定している。年齢は訊かなかったが、40歳くらいに見えた。

2人目に立ち上がったのは、ジャハナラ・コイさんといって、2人の息子がいるという。グラミン銀行のメンバーとなる前はとても貧乏で、夫は賃貸でリキシャ引き（ふつう、2人のりの幌付き人力車のようなものを自転車で引っ張る）をやっていたが、生活はとても厳しかった、という。グラミンの融資は、やはり乳牛の購入、さらに池を掘って魚の養殖に使ったという。そ

れで余裕が出るようになって、住宅用の土地を買ったのと、米作りのための田んぼ土地も買った。夫は自分のリキシャを買えるようになり、田んぼでできた米は自分がポップ・ライスを作り、市場に出して売っている。以前はしょっちゅう、飢えてひもじかったことがあるが今はそんなことはない、とっていた。

3人目は、チュドウ・シーマさんといって、以前の家族の生活はとても貧しかったという。資産もなく、土地、家、商売もなかった。家族全員が飢餓に苦しんできたという。以前は職のなかった夫は、今は三輪車のオート・タクシーの運転手として働いている。車そのものは賃貸であるが、一日で30-50タカ（1タカは約2円）稼いでくるという。グラミン銀行の融資を受けて、住宅を建てたし、農地も買った、と言っていた。

子供は何人がいいですかと聞いた私の質問には、みんな2人が理想的と答えてくれた⁹。3人以上の子供のいる人は半数ほどであった。ちなみに、1991年のバングラデシュ全国での平均所帯員数は5.6で、男女比は女性100に対し男性106である¹⁰。集会の最後には、全員で右手を挙げて、グラミン銀行の16ヶ条の決意を皆で唱和する。それらは、

- (1) どこにしようとも、いつでも、グラミン銀行の4つの原則：規律、団結、勇気と、勤勉、を守ります。
- (2) 家族に繁栄をもたらします。
- (3) あばら屋には住みません。出来る限り早く、修理し新しい家屋を建てるために働きます。
- (4) 年中野菜を育て、沢山食べ、あまりは売ります。
- (5) 植え付けの季節には出来るだけ多くの苗を植えます。

⁹チャンドプル県マトラブ（タナ）で行われた、人口・健康調査（1991-93）によると、2種類の調査の結果、合計特殊出生率（TFR）では、2.98と3.02であった。1991年のバングラデシュの全国推計では4.2であったので、DHSによる3.4という推計は過小評価であるという意見が強かった。バイラギ他（1997）による報告では、一人の女性が産む子供の数は3人以下になってきていることを示唆している。

¹⁰Bangladesh Bureau of Statistics, *Statistical Pocketbook, Bangladesh 99*, November 2000

- (6) 家族の規模は小さくするよう計画し、支出を抑え、健康には注意します。
- (7) 子供達に教育を与え、彼らが自身で教育費を出せるよう十分に稼ぐよう見守ります。
- (8) 常に子供達と我々の環境を清潔に保ちます。
- (9) 簡易トイレを作り、使います。
- (10) 水を飲む前に沸騰するか、浄化するためミョウバンを使います。ヒ素を除くため、フィルターを使います。
- (11) 息子の結婚で持参金（ダウリー）を受け取らず、娘の結婚で持参金を出しません。グラミンのセンターを持参金制度から開放します。幼児婚はさせません。
- (12) 誰に対しても不正義を行わず、誰の不正義も許しません。
- (13) 所得を高めるために、共同して大きな投資を行います。
- (14) いつもお互いに助け合います。誰かが困っていたら、皆で助けます。
- (15) どのセンターでも、もし規律の違反が分かったら、皆で行って規律回復のため助けます。
- (16) すべての社会活動に、全体で参加します。

集会の後、ビプロ・バルタ村を案内してもらっていくつかの家の中と外を見せてもらった。グラミン銀行は一般のローン以外に住宅ローンも提供している。土地の所有者にのみローンは出せることになっているので、女性たちは夫たちから土地の所有権を譲り受ける。最高額は25,000タカ（約55,000円）で、10年以内で返済する。典型的なグラミン銀行の住宅ローンの使い途は、トタン屋根（藁葺きではなく、トタンはそれだけで財産となる）でセメントの柱が最低8本以上ないといけない。そうやって住宅ローンで建てた家も見せてもらった。乳牛を飼っている家や、魚の養殖をやる池も見て回った。養殖池で魚を捕る方法は、2-3人の男が池に入り大きな布で魚を池の縁にまで追いつめた後そのまま手で捕まえるのだ。機会さえあれば人々は、よく働き儲けよう、もっと生活をよくしようとするのがよくわかった。

村の学校を見に行ったらとき数人の子供たちがついてきた。一人一人年齢を聞いてみた。5-6人のなかでひとり、10歳だと言うが6歳の子より小さい男の子がいた。ケニアの田舎でも私が見たのと同じ栄養不良による発育不足である。この村の人々の主な金かせぎの手段は、米を買ってきてポップ・ライスといって、味付けのふくらました米を市場で売ること、魚の養殖と販売、それから牛乳売り、である。

ガジプール県へ行ったとき、道路の拡幅と補修工事をしていて。土と煉瓦で作るのだ。道路脇に土を盛り広げ幅を広くしてゆく、手とショベルとで簡単な工事だ。舗装の仕方は、煉瓦を敷き詰めてゆくののだが、小さく砕いたものをばらまいてゆくだけだ。煉瓦を小さく砕くのが一仕事だ。道路脇の随所にある高さ1 m以上に積まれた煉瓦の山の上に、2人、3人とへたり込んでいる。金槌を右手に煉瓦を左手に、日がな1日煉瓦砕きをして働いている。おそらく、これがいい儲けになる仕事なのだろうか。それとも、他にないのだろうか。煉瓦を造る工場は、農村の各地でみられた。

(2) チャンギニ村

ダッカから南東に約3時間、コミラ県チャンギニ村を訪れた。その中のジョイプル北集落とジョイプル南集落を歩いて回った。コミラという人口約16万の都市は、2つ有名なものがあって両方とも訪ねた。一つはコミラ市郊外のマイナモティー仏教遺跡である。ラルマイ丘陵に散在する広大な仏教の遺跡が各地に点在している。修道院や寺院跡、博物館などである。素焼き、吹きざらしの薄茶色い建物跡に人々がそのまま登ったりしていて、このままだといつてしまうと危惧された。もう一つは、BARD: Bangladesh Academy for Rural Development (バード: バングラデシュ農村開発アカデミー) といって、アクタール・ハミッド・カーン氏によって1959年創設された、農村振興・開発のための、協同組合運動を農民に教え、訓練し、農村指導者を養成する学院、がある。ここには、宿泊施設があり、教員が住み込む学院と、それから全国の農村へ出かけて農協運動を指導する人たちがいる。

バードに1泊し、組織の説明を受け敷地内を見学し中の施設を見て回った。156エーカー(63ヘクタール)の学院敷地内はとても静かで清潔な感じであった。学院から車で20分ほどの村、チャンギニ村へ行きその中のジョイプル集落を見学させてもらった。ちょうどその日、午後から農協の年次総会があるというので飾り付けされ、演壇の用意のされた集会所で話を聞いた。農協長はアリ・ホセインさんといってとても流暢な英語を話す人であった。みんなが盛んに話してくれたのは、サブロー・サトーのことであった。20年以上前この村に入って泥につかりながら、田植えや様々な米作りを教えてくれた日本人のことであった。事務室には写真がたくさん貼ってあって、若いころのホセインさんと並んでたっているサトーさんの写真があった。

ジョイプル北集落は、田んぼへ水を引く仕組みがうまくできている。これも農協のみんなでお金と労力を出し合った成果だという。ホセインさんのような良いリーダーがいたせいだろう。しかも、ここでは農民側からの自発的な運動として伸びてきたという。コマラ方式と呼ばれる貧困解消のための総合的農村開発、つまり灌漑、肥料・農薬などの購買、新品種の導入、多角化などが成功している事例だろう。農協のメンバーには、女性も13歳以上の子供もなれる。学校の建物やモスクは新しく建て替えられており、ポンプでくまれた水は道路脇の側溝を勢いよく流れていて集落全体が活気ある感じがした。

(3) サディプール村

その後訪ねたのは、ダッカから東に約1時間、ナライガンジ県ショナルガン市(古い都)から田舎道を30分ぐらい入ったサディプール村であった。グラミン銀行の支店長はハビブさん。この支店管轄内には71のセンターがあって、返済率は100%だという。メンバー数は2693人(つまり、世帯)である。ハビブさんのこの支店は、1987年の5月に開設されたという。

サディプール村の一つのセンター集會に出てみた。やはり、小さな集會小屋に30人くらいの女性が集まって、毎週の返済事務をやっていた。ある人は

グラミンのメンバーになって15年だという。あるグループは9年目という。生活はやはり雨期になると大変だと言っていた。30人のうち、新聞を読む人は1人いた。テレビは全員見ている。カレッジに子供を送っている人は3人いた。ジョウトック（娘を嫁にやるときの持参金）制度は、グラミン銀行ではできるだけしないように指導しているが、ここではまだ何人かはやっていると言うことであった。簡易トイレ、管水道は全員が持っていた。夫が失業中の人はいなかった、すべて何らかの仕事をやっている。米作り、ジュース売り、ミルク売り、雑貨売りなどだ。機織りをやっている女性は3人いた。

ある一人の女性は、最近グラミン銀行で活発にやっている、グラミン・フォーン（テレフォーン・レイディー）をやっている。携帯電話を賃貸する仕事なのである。1回当たりの通話に、1-2タカ、または数タカの賃貸料をとっている。彼女の収入分（売り上げではなく収益）は月1500-3000タカ（3300-6600円）だという。これは、バングラデシュの年間一人当たりGDPが400ドル足らずなのに比較すると、すばらしいことである。平均所得が年間4万円程度の国で、農村女性が一人で携帯電話を貸して歩いて、毎月5000円、6000円相当を稼いでいる。グラミン・フォーン・レイディーが世界的に注目を受けているわけだ。

バングラデシュでは、地上の電話回線は人口千人当たり3本だという。インフラのとても悪いこの国で、人々は明らかに携帯電話の必要性・利便性を感じている。現在、バングラデシュでは4つの会社で携帯は125万台出ているといわれているが、その数字はどんどん上昇している。4社のうちグラミン・フォーンが最大の会社であり、2003年中には独自で100万人の利用者数を達成したいとしている。グラミン・フォーン・レイディーの平均月収は、家族で賃貸をやり、170ドル（約1万タカ=約2万円）という数字があるので、サディプール村の女性のかせぎは特に高いわけではない。携帯電話普及の1つの効用としては、金貸しを通さずに送金が出来るようになり、貧しい人々がだまされることが少なくなったという¹¹。

¹¹Anis Ahmed (Reuters News Story), "Cellphones Ring in Changes for Bangladeshis," (June 20, 2003)

一番子供数の多いのは何人かと聞いたら、子供5人の女性が一人いた。これまでで一番困ったことを聞いたら、全員が洪水のことをしゃべり出した。ひどかったのは、1998年の大洪水で、家中が水浸しになり、下痢、熱、風邪が村中にはやったそうだ。ふつうのモンスーンの季節なら何とかなるが、大洪水になると手がつけられなくなる。ほとんどの家が水浸しになったという。その後、グラミン銀行の住宅ローンで家を建てたところは、敷地を高くしたり、入り口の敷居を25cm以上にしたそうだ。今何が一番ほしいかを尋ねた。答えは、家、テレビ、冷蔵庫、ベッドであった。テレビは勿論カラーテレビのことである。

さて、集会の後、数軒の家を見せてもらった。そのうちの、ある機織りをやっている家族は印象的であった。敷地内に20坪くらいの機織り小屋を建てて、8台の織機が備え付けられている。機織り職人（すべて男性）12人を雇い、家族総出で糸の染め付けをやり、横の竈ではポップ・ライスを作っている。これらの機織りや材料の購入などすべてグラミン銀行からの借り入れでだんだん規模を大きくしていったという。ガムサと呼ばれる木綿織物は、様々な色と柄で、市場にもっていくと物によっては結構な値で売れる。この機織りに関する製造、購入、販売すべての総責任者が、この家の主婦、40歳位のグラミンのメンバーである。機織りを見学した後、ブリと呼ばれるポップ・ライス、それに、軽い油と唐辛子の味を付けたものを、次々に作ってはごちそうになった。たくさん食べたその味は忘れられない。

ある女性は、牛を2頭飼育し牛乳を売っている。同時に、グラミン銀行から借りたお金でミシンを買い、村の中で仕立屋さんをやっている。村人の色々な衣類を仕立てるのだが、布地はそれぞれ持ち込みで、彼女がお客さんのお好みのものに仕立て上げる。ミシンは家の中にそのまま置いてあったが、完成品や仕立て途中のものは、型紙と一緒に金庫の中に鍵を掛けてしまっていた。それを見せながら説明する彼女の顔は生き生きとしていた。

4. マイクロ・クレジット：

常識では、無担保融資の場合、返済率（＝1－貸し倒れ率）はそうでない場合と比較して、低いと考えられるだろう。利率もそうでない場合に比べて、かなり高いと思われるだろう。しかもそれが、少額で、貧困層が借り手である場合には、なおさらであろう。その常識を破って、ふつうの利率で、極めて高い返済率を達成しているのがグラミン銀行である。その高返済率の理由を探る研究は多くなされている。5人グループという連帯責任制、毎週返済するという強制的ともいえるシステム、などが議論の対象になっている。それらはほとんどの場合、銀行としての融資に関する側面だけを観察するものであった。

貧困削減を目指すマイクロ・クレジットは、直接の金融活動と同時に非金融サービスの提供という二重の活動を行っている。前者は、貧困層による自家営業活動の生産性を上げるように資本投入のための融資である。後者は、社会活動プログラムと呼ばれ、職業訓練、保健・衛生に関する啓蒙活動、識字教育、市民としての責任と権利についての理解、メンバー間の情報の共有と相互モニター（監視）などを通じる、人的資本の形成・育成である。グループ活動による誓約・約束・誓いの活動もある。そしてその結果、この両者による自家営業の増大と効率化による成功をてことして、自立的な貧困からの脱却を促進しようとする。

マッカーナンの調査による興味深い研究がある（2002）¹²。1991－92年に、バングラデシュ全国から87の農村で、合計で1798家計にインタビュー調査および詳細な標本調査が行われた。代表的なマイクロ・クレジットの組織的なプログラムとして、グラミン銀行、BRAC：バングラデシュ農村開発委員会（NGO）、BRDB：農業省に属するバングラデシュ農村開発局のRD-12、の3つを取り上げ、マイクロ・クレジット参加の家計、非参加家計を分けて調査した。各村を、マイクロ・クレジット・プログラムが入っている村と入っ

¹²S-M McKernan (2002).

ていない村に分けて、参加資格のある家計（土地所有が0.5エーカー以下の貧困層）と参加資格のない家計（0.5エーカー以上の土地所有所有者家計）とに分けて、金融活動からもたらされる利潤率と、非金融プログラムからもたらされる間接的な利潤率の上昇部分を識別しようとする計量分析である。

バングラデシュのように市場が不完全か、または欠如している経済では、通常の金融市場での担保と高利子率の存在は、選別、監視、実行のための取引費用が高いことに対応するマーケットの反応と考えられる。そこでは、貧困層が一般の組織金融からは排除されており、さもなくば地元の高利貸しに頼らざるを得ない状況は、経済合理的である。

BRAC（ブラック）は、バングラデシュ農村振興のために様々な活動を行っている大規模なNGO（非政府組織）である。NGOのショーケースといわれるバングラデシュでも、アメリカ・ジョージア州に本部を置くNGO、CARE（Cooperative for Assistance and Relief Everywhere. Inc.: 援助と救済のための協力会）と並んで代表格である。マイクロ・クレジット供与も、学校の建設、職業訓練、識字教育などの活動と平行してさかんに行っている。グループ単位での社会開発活動にも力を入れており、「17の約束」という誓約などでグループごとのメンバー間の教育・訓練を通じ、プロジェクト実行力を高めようとしている。BRDBは政府系組織で、村ごとに農協運動の指導や生活改善のための農民支援などを行っている。マイクロ・クレジット供与はやはりグループ方式をとっているが、1グループの人数は各地で異なっている。12人というグループもあれば、20人のグループもあり、連帯責任のプレッシャーもメンバーの誓いがあるにもかかわらず、弱くなる傾向は避けられない。

マッカーナンの約1800世帯の調査では、マイクロ・クレジットが入っている村と入っていない村、土地所有の規模別という二重の分類に基づき、3種のマイクロ・クレジット組織（グラミン銀行、BRAC、およびBRDB）と非マイクロ・クレジット家計における、総利潤を比較するモデルを作り、自分が集めてきたデータを使って計測している。自営業利潤を融資・資本の増加

によるものと、資本を固定した場合それを超える部分とに分けるという手法によって、融資活動からの利潤率上昇と非金融活動からの利潤率上昇を3組織別に示している。

計測結果、総利潤率の平均値では3つのマイクロ・クレジット組織間で顕著な差は見られないが、村の特性などいくつかの条件の下では、高利潤を上げている家計はグラミン銀行参加者が多いことが明らかになった。グラミン銀行方式によるグループ連帯責任制は、グループ形成に際して、返済リスクの高い者を篩いにかけてという意味で、保険などで起きる「逆選択問題」を回避するのに成功している。

3組織のマイクロ・クレジット融資活動からは、かなり大きくて正の、そして統計的に有意な利潤率上昇効果が観測された。非金融的活動からの利潤率上昇も正で、有意であった。特に、土地無し農民層での非金融サービス活動による利潤率上昇は、すべてのプログラムで統計的に堅固なものであった。マイクロ・クレジット参加による効果は、保有資産が大きくなる程減少した。非金融サービス活動の効果は、特にグラミン銀行で顕著であった。これらのことから、マイクロ・クレジット・プログラムは貧困削減に、生産性向上という観点から（特に土地無し層に）大いに期待されることが分かる。さらに、非金融的側面（グループの一体感醸成、連帯責任感、情報共有のインセンティブなど）は、通常の組織金融、個人への融資機関と異なり、貧困層の資金へのアクセスを増やすという、資本市場の不完全性を補うこと以上の機能を果たしていることが示された。

貧困削減にマイクロ・クレジットが有効でありそうなことは見えてきた。利用者の生活がマイクロ・クレジット利用の結果、改善されたことを示すのは極めて重大だ。しかし、これはそう簡単ではない。そこで、マイクロ・クレジット利用に関わる、影響評価についてその問題点を考察しておこう¹³。

影響評価の困難性は、3つの要因がある。第1に、ファンジビリティの問題がある。信用（ローン）とは、将来の所得・消費を犠牲にして、現在の

¹³Johnson & Rogaly, (2002, first ed. 1997) による。

支出を賄うものである。そのときに、ローンの用途を特定した方がよいのか、しないほうが良いのか、それとも用途には関係ないのか。食糧切符などの支出に殆ど影響を与えないことは知られている。グラミン銀行の仕組みの前提は、経済学者のそれであって、人々は何が自分にとって一番良いかを知っている、と言うものである。グループ制の中で、最適なものを選ぶ能力があり、一番儲かることをするだろう。ローンの用途が決められているときに、その通り使われるかどうかの保証はない。第2は、影響そのものの測定である。まず、他のものの影響を排除しなければならない、あるいは識別できなければならない。つぎに、計測可能でなければならない。そして、計測したものが実際に評価したいものでなければならない。第3は、人々の全般的な生活水準の向上がみられたとして、マイクロ・クレジットとの因果関係はいかにして保証するのか、である。これらはどれも、詳細な検討が必要な項目である。

ここでは、影響評価のための筆者が考えるいくつかのアイデアを列記しておこう。(1) Self-esteem: 社会の活動に関わることによって、貧者が自分のことをどの様に考えるようになったか、社会に対する考え方がどう変わってきたか、でみる事が出来るかもしれない。(2) Social capital: 社会関係資本、例えば、信頼関係、相互依存関係などの変化が捉えられると良いかもしれない。(3) 動学的な変化: 所得、消費、貯蓄、資産、など継続的・断続的にモニター出来る事が望ましい。(4) 質的变化と量的な観測を組み合わせる: さまざまな指標を構築しておき、それらの変化・動きを捉える事が出来ると、評価に有用だろう。

5. おわりに:

グラミン銀行方式と呼ばれるマイクロ・クレジット組織の他の国での採用・適用に関しては、世界で60カ国以上で試みられている。アメリカではシカゴの貧困地域や北カロライナ州、アーカンソー州で、イギリスではロンドンな

どで、フランス、イタリア、カナダでも、それぞれの地域に適した形で、このグループ制無担保少額融資が貧困層の自家営業活動の成功に貢献している。開発途上国では、ボリビア、チリ、アルゼンチン、マレーシア、インドネシア、ベトナム、中国、フィリピン、スリ・ランカ、タンザニア、エチオピア、ナイジェリアなどで活発に行われている。最近では、独立間もない東ティモールでも、グラミン銀行方式のマイクロ・クレジットの導入が検討されている。

今や、世界中で何千とあると言われる、NGOや政府関係機関などによるマイクロ・クレジット組織が、どこまで成果を上げられるか、いかにして自己維持可能性を確保するか、などは開発の中心課題として取り上げられるであろう。様々な種類の、多岐にわたる活動を網羅しているので、その整理だけでも大きな作業となるだろう。

1995年の世銀の報告（カンドウカー他）でもその成果が高く評価されたグラミン銀行は、2002年新しい方式を採用し、第2期グラミン（Grameen II）を始めた。その組織改革に当たって、ユヌス博士は「我々の基本原則ははっきりしているので、それを堅持する限り組織改革は柔軟に行うことが出来るし、柔軟でなければならない」と述べられた時（2003年2月のグラミン銀行本部での対談で）、感銘させられたことを覚えている。将来の維持可能性とさらなる活動の拡大・増大と深化が計られるであろう。これまで、貧困層のニーズに直接対応してきたグラミン銀行が、この原則を維持しながら、どこまで組織的な拡大・深化を進めるかが大きな課題となるだろう。

参考文献：

1. Bairagi, R., S. Becker, A. Kantner, K.B. Allen, A. Datta, and K. Purvis, "An Evaluation of the 1993-94 Bangladesh Demographic and Health Survey within the Matlab Area," Asia-Pacific Population Research Reports, No. 11, May 1997, East-West Center, Honolulu, HI
2. David E. Bloom, Patricia H. Craig, & Pia N. Malaney (2001), The Quality of Life in Rural Asia, Oxford University Press for ADB.

3. Susan Johnson & Ben Rogaly (1997), Microfinance and Poverty Reduction, Oxfam
4. Shahidur R. Khandker, Baqui Khalily & Zahed Khan (1995), Grameen Bank: Performance and Sustainability, World Bank Discussion Papers, No.306, The World Bank
5. _____ (1998), Fighting Poverty with Microcredit: Experience in Bangladesh, Oxford University Press (for the World Bank)
6. _____ (2003), Micro-Finance and Poverty: Evidence Using Panel Data from Bangladesh, Policy Research Working Paper, No.2945, The World Bank
7. Joanna Ledgerwood (1999), Microfinance Handbook: An Institutional and Financial Perspective, The World Bank, Washington, D.C.
8. Signe-Mary McKernan (2002), "The Impact of Microcredit Programs on Self-Employment Profits: Do Noncredit Program Aspects Matter?" The Review of Economics and Statistics, February 2002, 84(1), 93-115
9. Aminur Rahman (1999), Women and Microcredit in Rural Bangladesh: An Anthoropological Study of Grameen Bank Lending, Westview Press, Boulder, CO.
10. Marguerite S. Robinson (2001), The Microfinance Revolution: Sustainable Finance for the Poor, The World Bank & Open Society Institute, Washington, D.C. & New York
11. Mark Schreiner (2003), The Performance of Subsidized Microfinance Organizations- BancoSol of Bolivia and the Grameen Bank of Bangladesh, The Edwin Mellen Press, Lewiston, NY